The Historical Society of Japan

歴史理論

歴史理論は、史学方法論・史学史・歴史教育・歴史哲学を含むヒストリオロジー研究であると私は理解している。一九六七年に新設された歴史理論の項を前号まで通読して二つのことに着目した。ひとつは、いち早く世界の歴史研究の大きなうねりを察知して自家薬籠中のものとし、自らの研究にその手法を取り入れてゆく日本人歴史家の知的欲求は千年以上少しも衰えていないこと。もうひとつは、歴史理論の執筆者には、他の項目の執筆者と異なり専門家がいないこと。歴史理論の専門家を名乗る執筆者はこれまで一人のみである。西洋史担当教授か思想史担当教授でかつ歴史理論に関心の深い歴史家が執筆者のほとんどだ。日本の大学の歴史学科には歴史理論の講座もなければ担当教授もいないのだから当然かもしれない。にもかかわらずなぜ歴史理論の項目が存在するのか。それは、歴史研究がひとつの学問（ディシプリン）であろうとするからではないか。

＊

文学部に歴史学科を持つ多くの大学では、歴史理論・史学概論は複数教授によるオムニバス形式、或いは教授持ち回りで講義が行われているところがほとんどだ。日本の大学における歴史理論の発祥は、西洋史の教授がヨーロッパの近代史学理論を翻訳・翻案して紹介したことに端を発する。つまり理論は自分がつくるものではなく、「西方から来るもの」という考えが支配的であったから自前の歴史理論専門家など必要なかったのだ。基本的にはこの発想が現在でも続いている。

結果として、日本の大学では理論と学説史を軸におかない歴史の研究体制が出来上がった。諸外国では、歴史研究は学部組織で行われることが多く、理論と学説史の講座或いは教授ポストは必ず存在する。これは欧米に限らず中国の大学でも同様である。経済学部には経済理論と経済学史の教授がかならずいるが、歴史学科には歴史理論と史学史の教授は存在しないのだ。

海外の大学で歴史研究が危機だと言う話は聞かないが、日本の大学では多くの歴史教授ポストが人類学や社会学等に取って替わられている。これは、歴史研究とは何かを考えずに重箱の隅をつつくことで悦に入っている歴史教授に対して、学生がノーと言っていることに他ならない。人類学者や社会学者は理論という鎧をまとい、方法という刀をもって「過去」に切り込んでいるのだ。

また最近では、歴史が国際関係論や地域研究に取り込まれてい

NII-Electronic Library Service

The Historical Society of Japan

る。時間的契機の中で物事を見極めようとする思考法が、空間的契機の中で物事を見極めようとする思考法の中にその一部として矮小化されているのだ。

日本の歴史研究が受難の時代に直面しているのは確かである。歴史学が学問であるのならば、その軸となるべき理論と学説史を主柱にする必要がある。法学部の政治史と経済学部の経済史と文学部の歴史学科を統合して、ひとつの独立した研究体制を組織化しないと、歴史研究は学問としてのアイデンティティーを失い、地域研究の一部に解消してしまう。四文字熟語の新学部より、世界の大学にあるのに日本の大学にはない歴史学部が必要だと痛感する所以である。

＊

史学概論のスタイルは、ここ数年大きな変化を見せている。福井憲彦『歴史学入門』（岩波書店）はその最新の成果で、世界の歴史家が取り組んでいる様々なテーマとアプローチの方法を紹介するかたちで歴史研究とは何かを語っており、今の若者を歴史に引きつけるには格好の説得方法だ。なかでも「歴史人口学が拓いた地平」は、速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』（藤原書店）とあわせ読むと、歴史人口学の理論的奥行きと研究対象の幅広さが実感できる。甚野尚志編『東大駒場連続講義　歴史をどう書くか』（〈講講社選書メチエ〉）は、やはり歴史研究の実例を紹介するという手法の歴史研究入門であり、可視化史料の解釈を通して歴史を語る手法は、きっと何人かの学生を歴史研究の世界に誘い込むに違いない。東京大学教養学部歴史学部会編『史料学入門』（岩波書店）も、実際の史料操作のサンプルを提示することで、歴史研究のおもしろさを教えようとしている。いずれも、暗記する歴史で育てられてきた若い世代の意識を、ヒストリアの原義である探求する歴史に転化させるという点で、よく考えられた著述である。

しかし、実例による歴史入門というスタイルの史学概論だけでは、学問としての歴史研究の全体像を若者に伝えることは出来ない。ピーター・バーク（佐藤公彦訳）『歴史学と社会理論』（慶大出版会）のような体系的な構成をもつ史学概論も必要不可欠だ。

＊

史学史の領域における本年度の最大の収穫は、稲葉一郎『中国史学史の研究』（京大学術出版会）である。全八四〇頁の浩瀚な著述は、複数専門家による論文集形式が主流の現代において、一個人として中国史学理論全般を俯瞰した貴重な研究成果といえる。これまで中国史学史研究の頂点とされてきた内藤湖南の『支那史学史』（一九四九、弘文堂）は歴史書全般を議論しているが、本書は歴史理論と史料論それに歴史認識に焦点を絞って中国史学のエッセンスを論ずる手法を採用している。その基本スタンスは、「中国の歴史叙述を欧米風の史学研究法の立場から考察すること」であり、その結果として中国史学理論を世界共通の議論の場に引き出すことに成功している。

司馬遷親子が秦の顕彰のために『史記』を書いたとする論、劉知幾が『史通』を著述出来たのは五代史編集作業のための史料を参照できたからだという論など興味深いが、なかでも司馬光の

NII-Electronic Library Service

The Historical Society of Japan

『資治通鑑』作成に果たした『歴年図』の役割に関する議論の展開は秀逸である。歴史認識的行為に果たす歴史年表の役割の重要性を考えると、貴重な指摘といわねばならない。

また、地方志は歴史であり将来編纂される国史の史料集としても重要であることを指摘した章学誠が、中央政府の史料ではなく中国各地の史料をもとに国史を構想していたとの議論は今日的意義をも合わせ持つものだ。

現在の中国でも、公的機関による歴史編纂事業は途絶えていないし、中国を模倣した日本の公的機関による歴史編纂事業は、今まさに地方史レベルで広範に行われている。章学誠の議論は、今行われている日本の地方史編纂に関わるテーマでもあるのだ。

明治以降の日本の歴史理論は、そのルーツを伝統的中国史学ではなく、近代西洋史学においているが、日本の歴史編纂、歴史研究、歴史意識の相当の部分が伝統的中国史学に基づいていることを考えあわすと、劉知幾や章学誠の議論を我々自身の歴史理論の一部として理解する姿勢も大切である。

＊

歴史的時間論・歴史的空間論は歴史理論の重要な研究領域のひとつだ。春成秀爾『考古学はどう検証したか』（学生社）は、歴史的時間について示唆的な議論を行っている。考古学者はこれまで層位学と形式学に基づいて歴史的時間を編年的に構成することに尽力してきた。この堆積的時間とでも表現すべき時間観念は、時間は流れない積み重なるものであるという歴史的時間論の実例として大きな役割を果たしている。次に日本人は自国の歴史が古ければ古いほどそこに価値を認める傾向があるという歴史意識の問題だ。本書を丹念に読んでゆくと、二〇〇〇年に起こった捏造石器問題の背景にある、より古い歴史に根ざす国であってほしいという日本人の歴史意識の特質がみごとに議論されている。

歴史認識という視点から興味深いのは、弥生時代なる歴史用語が一旦定着すると、こんどはこの用語をもとに我々の歴史的思考が展開されるようになり、ひいてはこの時代区分表現から抜け出せなくなるという思考プロセスである。ひとたびつくられた時代区分表現は、歴史的思考に大きな影響力を及ぼす。これは過去を振り返るという歴史認識的行為においては、絶対年代だけではなく、「区切られた時間」や「箱詰めされた時間」が必要不可欠であることを示している。

歴史的空間については、歴史空間論の先駆的業績であるポール・ズムトール（鎌田博夫訳）『世界の尺度』（法大出版局）がある。歴史空間論の現在については、米家泰作「歴史と場所」（『史林』八八―一、二〇〇五）が歴史地理学から見た歴史的空間論の現在について手際よく纏めている。過去を表象する媒体としての景観とか、景観に体現された過去といった歴史認識に関わる歴史地理学分野の業績について注目してゆくことが必要だ。

＊

歴史教育では、世界史未履修問題に関して新聞雑誌等で多くの記事や論説が掲載された。今回の騒動で分かったことは、世界史をたとえ必須科目にしても履修率は上がらないことだ。その原因は、他の科目に比して世界史と日本史の内容が多過ぎるため高校

NII-Electronic Library Service

The Historical Society of Japan

生に敬遠されているからである。現実的な解決法として、世界史と日本史の教科内容を他の教科と同程度の分量に減らして履修しやすくすることもひとつの方法だ。内容をスリム化することで大学入試の受験科目として多くの高校生が歴史を選択し、歴史を学ぶ機会の増えることの方がより重要であると筆者は考える。

歴史教育という言葉は小中高等学校の歴史を指すものとして考えられ、大学の歴史教育と連動して議論されてこなかった。日本史・世界史という高等学校での歴史教育体制と、文学部歴史学科の日本史・東洋史・西洋史という地域割りの分科専攻制とを整合させること、法学部の政治史専攻や経済学部の経済史専攻との関連について制度的調整を行うことが必要だ。

＊

国際的な場での歴史理論研究にふれておこう。二〇〇六年は歴史理論に関して八件の国際研究集会が世界各地で開催された。このうち一件は、筆者が主催した日本学術振興会国際研究集会「二一世紀の歴史学：学問・方法・教育」（山梨大学、一二月六―八日）である。この会議ではジョージ・イッガーズ、張芝聯、ユルン・リューゼン等、海外から計一九人の歴史理論家を迎えて、ヒューマニズムと歴史的思考、二一世紀の歴史叙述、過去を表象する形態の多様性とその統合等のセッションを設けて会議を行った。筆者の基調講演は *History and Theory* 46 (May, 2007) に "The Archetype of History in the Confucian Ecumene" というタイトルで掲載される。

本年度、海外で行われた国際研究集会で、筆者が出席し研究報告したのは五件だけであった。例年一〇件前後の国際研究集会が開催されているが、日本人で研究発表するのが筆者一人という状態がここ十数年続いている。

歴史理論に関する国際学会は、国際歴史理論及史学史学会があり、二〇〇五―二〇一〇年度の会長には筆者が選出されている。歴史教育に関しては国際歴史教育学会があり、二〇〇五―二〇〇八年度は筆者が理事を務めている。どちらの学会も日本人会員はきわめて少ない。

歴史理論に関する世界的雑誌は、*History and Theory*, *Storia della Storiografia* 等数種類がある。中国における歴史理論の雑誌としては、『史学史研究』、『史学理論與史学史学刊』等がある。これに加えて、最近は歴史理論関係の論文集が数多く出版されている。ジュランディル・マレルバ編 *A Historia Escrita* (São Paulo : Contexto) は世界各国の最新の歴史理論を紹介したもので、カルロ・ギンスブルグやヘイドン・ホワイトと一緒に筆者の "Historiografia cognitiva e historiografia normativa" が収録されている。この論文は歴史叙述の役割を認識方法としての歴史と規範形成としての歴史という視点から論じている。国際歴史理論及史学史学会の元会長であるジョージ・イッガーズの傘寿記念論文集 *The Many Faces of Clio* (Berghahn Books) には筆者の "'Historiology' and Historiography" が掲載されている。これはヒストリオロジーという用語の意味の変遷を通して歴史認識論が誕生する経緯を精査した論文である。また二〇一〇年に刊行予定の *Oxford History of Historical Writing* 全五巻の企画が

NII-Electronic Library Service

The Historical Society of Japan

この二年でほぼ完了した。日本人でこのプロジェクトに参加しているのは第三巻の共編著者である筆者だけだ。歴史理論に関する限り日本人は消費者であって生産者ではない。海外の歴史家に向かって日本から独創的な歴史理論が発信されることを望む。

＊

歴史博物館の展示は言葉でなく物で表現するひとつの歴史叙述だ。二〇〇五年秋に開館した山梨県立博物館は網野善彦の発案により、テーマ別展示という非―時系列的展示方式を導入した最新の歴史博物館である。ところが、時系列が錯綜しているため展示が分かりにくいといという訪問者からの意見が寄せられ、子どもからは学校の歴史教科書と違うから理解が難しいという感想が出たため、博物館は時代順の流れを示すパンフレットを新たに準備したそうである。

筆者は日本学術振興会国際研究集会に出席した海外からの参加者一五名をこの博物館に引率し意見を聞いたが、一様に理解しにくい展示であるという回答だった。博物館展示は、歴史書のように制作者が解釈した結果を提示するのではなく、閲覧者に解釈をさせ・新発見をさせる場なのではないか。

＊

近現代の歴史認識に関する興味ある議論がいくつかあった。ひろたまさき／キャロル・グラック監修『歴史の描き方』全三巻（東大出版会）は、歴史の描き方というよりも近代日本の社会文化思想論集であり、なかでも戦後日本を歴史としてどのように書くかという点で意欲的な論文集である。成田龍一は『歴史学のポジショナリティ』（校倉書房）で近代日本の歴史学について多様な視点から議論を展開している。所収論文の中の「時間と近代日本」は現代人の時間意識の諸相を議論していて興味深い。併せて西本郁子『時間意識の近代』（法大出版局）を読むと、時間が社会化されてゆくプロセスに魅了されて興味が尽きない。

＊

日本史研究でも外国史研究でも日本の歴史家は自前の大きな問題を見失っているのではないか、という三谷博「日本の歴史学は、どこに向かうのか」（『史学雑誌』一一五―一一）の指摘がある。古代ギリシャ・ローマ史研究においてはヨーロッパ人研究者の追随ではなくむしろ彼らのこれまでの研究を相対化させるという東洋人独自の視点があるではないか、という南川高志「古代ギリシア・ローマ史研究の発展と東洋人学者の立場」（紀平英作・吉本道雅編『京都と北京』角川学芸出版）の示唆がある。この二人の見解は筆者のこれまでの議論と軌を一にするもののように思える。歴史家自身が自分の研究を通して、日本の歴史学についてこのような認識を持つに至ること自体、ディシプリンとしての歴史学への志向が歴史研究そのものに内在していることの証でもある。劉知幾の表現を借りるならば、まさに史識を備えた歴史家の言といえよう。

（佐藤正幸）

NII-Electronic Library Service